

保育の実践力につながる「表現」授業のあり方に関する一考察：造形表現の模擬保育を通じた学生の学び

著者	栗山 誠
雑誌名	教育学論究
号	11
ページ	37-46
発行年	2019-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028315

保育の実践力につながる「表現」授業のあり方に関する一考察

— 造形表現の模擬保育を通した学生の学び —

A Discussion on the Significance of Expression Classes Designed to Cultivate Practical Nursery Education Skills: Students' Learning through Mock Nursery Classes on Formative Expressions

栗山 誠*

Abstract

This study examined the roles of lessons designed to cultivate students' ability to engage in nursery education practices through mock nursery classes on formative expression activities and discussions on the observations with focuses on the students' willingness and awareness. The findings revealed that, in the mock classes, the students were exposed to multifaceted experiences linked to practical nursery education skills. In other words, they have developed the practical attitude to flexibly respond to children's statuses by facing the reality that nursery education does not go as they initially envisage. Also, through the live experience of observing children expanding and engaging in activities, the students seemed to have understood the importance of formative activities, which prioritize the expression process, in the nursery education practice. Because such learning and awareness are given priorities in the lessons focusing on the teaching method in nursery education, the study confirmed the importance of continuously deepening the contents of mock nursery classes in the future.

キーワード：保育実践力 模擬保育 造形表現 授業改革

1. 背景と課題

幼児期の子どもたちの造形活動過程では様々な試行錯誤や発見、自己実現、他者とのコミュニケーションなど、子どもにとって豊かな育ちの機会や学びが詰まっている。保育者は子どもが感じたことや考えたことを自分なりに安心して表現できるよう、環境設定や援助を行う必要があり、そのためには、自ら実践したことを常に振り返りながら子ども理解と保育の質を高めていくことが求められている。

実際に、2017年に改定（改訂）された3法令（幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領）では、各施設あるいは保育者が、子どもの育ちや保育のねらいに基づき計画（Plan）を立て、保育実践（Do）し、そして実践を振り返り、子どもの様子や改善点を確認し、「幼児教育において育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の観点などを参考にしながら評価や子どもを理解する（Check）ことにより、

環境設定や保育内容を改善（Action）してさらに質の高い実践を実現させるという流れが大切にされている。このようなPDCAサイクルを各施設または個人レベルで確立し、改善し続けることで保育の実践力¹⁾が向上し、保育者としての専門性を高めることにつながることを期待されている。

さて、大学における保育者養成の授業、特に保育内容や指導法に関する演習授業でも、学生が子どもの発達を理解した上で、現場の保育実践に少しでも対応できる学びの工夫が期待されている。その一つの方法として、授業においてもPDCAサイクルを導入して、学生が実践したことに対して保育の視点で自ら省察する姿勢を身につけることが、将来、現場に出て実践を行う際に有効であると考えられる。またこうした自己省察の態度を身につけることは、生涯学び続ける力の基礎となると思われる。

造形的な表現活動においては、単にかく・つくる活動に関する知識や技能を修得するだけでなく、子どもの発達や様々な保育理論と重ねながら、実際

* Makoto KURIYAMA 関西学院大学教育学部教授

の保育の中で造形的なスキルを活かし、子どもの育ちを支援できる深い学びが必要になってくる。特に造形表現の「過程」に注目して育ちを支援する力をつけることは、この領域にとって重要な課題である。なぜなら、造形領域においては、他の表現活動と異なり、活動結果としての「作品」や「痕跡」が目に見える形として残るのが特徴であり、この見える部分にのみに注目してしまうと子どもの育ちが見えてこない場合が多い。つまり、モノに関わる活動過程で子どもは、探索、試行錯誤、発見、イメージ活動、モノや他者との対話などを体験し、驚きや喜びなどの感情を持って充実した時間を生きている。そこにいる子どもはまさに表現する姿といえるが、そうした過程の体験は後に残る「作品」や「痕跡」からは見えにくいのである。かく・つくる活動が、「作品主義」に陥るのは、こうした表現過程を軽視することに由来する。したがって造形の保育の中では、表現の「過程」で子どもの体験がどのような育ちにつながっているのかを注目し、そのためにどのような援助があるのかといった、自己省察の観点が必要である。

2. 目的

本研究では、保育者養成としての「表現」授業において、学生が授業内容を理解し、できるだけ保育実践に即応できる力を身につけるためにどのような授業のあり方、工夫が必要であるかを検討しようとするものである。その研究の一環として本論では、表現領域の中でも特に造形表現に関する授業の中で、学生相互の模擬保育を実施し、PDCA サイクルをモデルとした自己省察による主体的な学びと保育の実践力について考察することを目的とする。特に表現過程を大切にしたい造形活動の保育の実践力につながる学びや体験がどのようにあらわれてくるのかを、まずは整理することを本論の目的とし、今後、理論と実践の融合を目指した授業改善にむけた研究につなげていくこととする。

3. 研究の方法

本研究の大きな流れとしては、学生による教材研究と模擬保育実践の後、4種類の振り返りを行い、そこで学生がどのようなことを学び、保育の実践力にどのようにつながっていくのかを考察する。具体的には下記のようなものである。

(1) 模擬保育の形式

これまでも教員・保育者養成系大学における模擬形式の授業で、学生の学びや意識変化を調査した研究は多く発表されている²⁾が、表現領域、特に造形活動を中心にした模擬保育を対象とした研究は少ないといえる。本論における模擬保育の形式は、中川香子・青木宏子³⁾が保育内容「表現」の授業で積み重ねてきた「造形まつり」形式を若干変更し、学生の学びをより可視化するために模擬実践のルールや振り返りの手続きを詳細に設けたものである。

手順としては、学生5～6名がグループを組み、材料・教材研究を行い、共同で計画を立て、模擬保育実践を行うというものである。本論で調査対象とする2018年度の授業では1クラスの中に10グループをつくった。実践は2コマ分の授業時間(90分×2回)を確保し、それぞれ半数グループが保育を行い、残りのグループが子ども役になった。保育時間は20分と限定し、子ども役は自由にどこかの保育(グループ)に参加することとした。1回目の保育(20分)後、子ども役の学生は別の保育(グループ)を体験し、1コマの授業中で3つの模擬保育を体験できるようにした。一方、保育者側のグループは、この1コマ授業の中で同じ保育を3回繰り返すことになり、その間、メイン保育者や補助保育者をメンバー内で交代し、保育する側も様々な体験ができるようなシステムにした。第2回目の授業(別日)では、保育者役グループと子ども役グループが入れ替わることにした。

(2) 模擬保育の実際

各グループの保育テーマは、かく・つくる、造形遊びなどから自由に選ぶこととした。学生には、作品を完成させることが目的ではなく、幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領等のねらいや内容に即して、子どもの育ちに目を向けたものにするを指導した。つまり、子どもが興味に基づいて活動過程を楽しむことができ、試行錯誤を体験し、個性を出せる内容の保育展開を考えることを伝えた。対象年齢は幼児(3歳～6歳)が楽しめる内容にした。

なお、この模擬保育プログラムの前に、学生は教師が提供する様々なタイプの保育について資料や演習を通して学び、指導案の内容についても学習している。したがって、ねらいと保育との関連につい

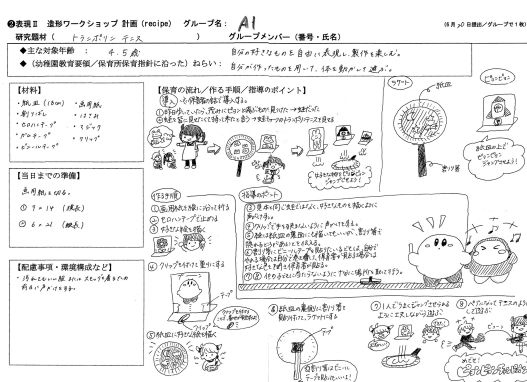


図1 自由な形式の保育計画書

で、ある程度把握できる力がついている段階で、この模擬保育を組み立てるという流れがある。ただし、今回の模擬保育では、具体的に一般的な指導案まで作成することはせず、「対象年齢」「子どもの育ちを意識したねらい」「当日の準備物」「環境構成・配慮事項」「指導のポイント」「内容と手順」を含めた自由な形式の計画書(図1)をグループで1枚作成することとした。

(3) 材料・教材研究について

造形表現に関する保育を組み立てる上で材料研究をし、試作品を作る体験は欠かせない。本来、保育現場においては、子どもの遊びや発達状況、季節や行事の流れを読みながら、保育の課題やさらに深めたい内容を鑑みて、ねらいや保育内容(教材等)を考えていく。しかし、本授業においては、その前提は省略し、とりあえず子どもの様子を各自イメージしながら、かく・つくる活動を通した保育内容を構想することにした。学生には書籍資料など様々な情報を元に、各自が設定する年齢に合った形で素材研究をし、子どもが実施することを想定して試作をしたり環境構成を考えたりする時間を設けた。目標として試作品や教材研究を5種類以上行うことを伝え、作業行程や試作した物をA4用紙に簡潔に記録させた。そして、各個人が試作や教材研究したものをグループで持ち寄り、グループで一つ代表の教材テーマを選出し、それを模擬保育としてどのように展開していくのかグループワークで話し合った。

(4) 調査の具体的な方法

本研究は2018年度保育内容「表現Ⅱ」の授業で、筆者が担当する2クラスを対象(受講学生89名)と

し、90分×7回分の時間を使用し材料研究と模擬保育の実践を行い、振り返りの時間をつくった。振り返りは次の4つの側面から行った。①ルーブリックによる活動の自己評価、②子どもの立場で参加した模擬保育で気づいたことを感想シートに記述、③クラス全体でのグループごとの発表と共有、④自分のグループの模擬保育実践の体験と子ども役で参加した学生からの感想シートを参考にした自己省察レポート作成、以上である。この中で、②と③で考察されたことは、④の自己省察レポートに反映されているので、本論では以下、①と④を分析して造形表現に関する保育実践につながる学びについて調査し、授業のあり方を考察する。

4. 振り返りからの調査と結果

(1) 模擬保育実践への関わりの態度、意欲(ルーブリックを使って)

①調査の概要

今回の模擬保育プログラムの目的は子どもに造形活動や造形表現の楽しさを伝える工夫をすることを通して、保育計画、教材研究、環境構成、援助などについて体験的に学ぶことである。まず、学びの内容を調査する前に、学生はこのプログラムにどのような態度・意欲で関わることができたのかを確認することにした。そのために資料1の自己評価ルーブリックを作成した。本来ルーブリックは、学生自身が自己の態度や意欲を自己の基準で確認し評価するものであり、学生の学習状況を客観的に捉えることは難しいと考える。本研究においては、あくまでも意識調査として活用出来るものであると捉えた。縦軸は模擬授業で学生が体験する項目で、【A. 個人の材料研究】【B. グループでの材料研究】【C. 模擬保育実践】【D. 保育内容計画の作成】【E. 子どもの視点で分析】を設定した。横軸は目的に沿った態度や学びがどのくらい実現し、深められたのかを段階的に表した尺度を示している。

②結果と考察

a. 材料研究(個人研究/グループ研究)

学生は個人での材料研究をどのくらい深められたかという意識調査(表1)では、情報収集するのみが19%、試作をして新たなスキルを獲得したとするものが57%、さらに、オリジナルの教材開発ができたという学生は24%と高い割合になっている。これ

表1 個人による材料研究がどこまで深められたか

評価 素点→	5	4	3	2	1
A. 材料研究 (個人研究) どこまで深められたか	〈右〉にプラスして、時間をかけて試行錯誤する過程を十分に楽しんで取り組むことができているとともに、自らのオリジナル性を見いだすことができる。	時間をかけて様々な情報を探索し、試行錯誤することができる。失敗を恐れず、新しい技術や手法を獲得することができる。	情報収集はするが、具体的に素材に関わることが少ない。これまでの自分にとどまっている。	情報収集をすることに消極的である。また素材に関わることに消極的で、これまでの自分にとどまっている。	取り組んでいない、発表していない。
人数 (%)	21人 (24%)	51人 (57%)	17人 (19%)	0人	0人

表2 グループによる材料研究がどこまで深められたか

評価 素点→	5	4	3	2	1
B. 材料研究 (グループ研究) どこまで共同で深められたか	〈右〉にプラスして、仲間の表現に対して受容・共感・賞賛の姿勢を持つことができている。	仲間と十分協働して取り組んでいる。	仲間の表現に対して十分開いていない。あるいは、仲間と十分に協働して取り組めていない。	仲間と協働ができていない。	取り組んでいない、発表していない。
人数 (%)	48人 (54%)	41人 (46%)	0人	0人	0人

に関しては、素材研究の時間を90分×3コマ分確保し、各自が書籍などの情報収集にとどまらず、具体的な材料に関わりながらの試作研究が十分でき、試行錯誤の過程を楽しめたことが要因として考えられる。

また、グループで一つ選出した教材を、実際の保育の視点、子どもの視点で練り上げていくという作業においては、全員が、友達と共同して取り組むことができたとしている(表2)。さらにその半数が、仲間の表現に対して受容・共感・賞賛の姿勢を持つことができたとしている。こうしたことをみると、お互いが情報交換、意見交流をしながら一つの目標に向かって保育を作っていく過程をグループワークによって体験できたと自覚していることがうかがえる。

b. 模擬保育実践

子どもの興味関心を考えた上で目的に沿った実践ができたと答えたのは98%であった(表3)。その中で約半数の学生が、活動過程において柔軟に内容を展開することができたと答えた。計画通り実行するのではなく、子どもの様子を見ながら対応を調整していく姿勢は保育の実践力につながると考えられる。

c. 保育内容計画の作成について

今回はグループの共同作業で一つの保育を組み立

てるとともに、簡単な自由形式の計画書を作成した。そこで援助のポイントや準備の詳細について他者も活用できるように書くことができたと感じた学生は38%であった(表4)。半数近くは、とりあえず保育内容の流れのみを書いたという意識である。本授業では保育内容の把握と展開、援助について学ぶことが主目的であるので、指導案作成については、他授業との連携をさらに図っていく必要性が示唆された。

d. 子どもの視点/子ども役でどのように関わったか

子ども役になって模擬保育を受けた時、40%の学生は、自分が参加した保育について、その援助・指導の課題を指摘できると回答している(表5)。さらに全体の37%の学生は改善点を提案できると答えた。この結果は、模擬保育は、子どもの視点で保育を受ける側に立った時にも、保育実践力につながる多くの気づきが得られる可能性があることを示している。

表3 模擬保育実践 どのような実践ができたか

評価 素点→	5	4	3	2	1
C. 研究発表 (模擬保育実践) どのような模擬保育 実践ができたか	〈右〉にプラスして、 模擬保育に参加する 学生(子役)との対 話の中で、興味・関 心を大事にしながら、 柔軟に内容を創造的 に展開できている。	グループで設定した 模擬保育の「目的」 に沿った実践ができ ている。また子ども の興味・関心を大事 にしている。	グループで設定した 「目的」と模擬保育の 内容がかけ離れてい る。	研究発表に参加した が、積極的に取り組 めていない。	取り組んでいない、 発表していない。
人数(%)	30人(34%)	57人(64%)	2人(2%)	0人	0人

表4 保育計画書 どのような指導計画であったか

評価 素点→	5	4	3	2	1
D. 保育内容計画 (レシビシート) 指導計画の書き方は どうであったか	〈右〉にプラスして、 レシビシートの内容 が楽しく有意義で、 十分に活用できるレ ベルである。	材料研究で学んだこ とを踏まえ、チーム で協働しながら、レ シビシートが作成で きている。	チームで協働してい るものの、材料研究 で学んだことが十分 に踏まえられていな いレシビシートに なっている。	チームでの協働が不 十分であり、完成度 が低い。	未提出。
人数(%)	34人(38%)	44人(49%)	10人(11%)	1人(1%)	0人

表5 子ども役としてどのように関わったか

評価 素点→	5	4	3	2	1
E. 子どもの視点/子 ども役になって 子ども役としてどの ように関わったか	〈右〉にプラスして、 援助・指導の課題が 指摘できるとともに、 改善策を提案できる。	模擬保育に積極的に 参加し、子どもの視 点から、援助・指導 の課題が指摘できる。	子ども役として模擬 保育に参加し、保育 者の援助・指導のも とで活動ができる。	模擬保育に参加はす るが、何のために行 なっているのか目的 を見失い、受身的で ある。	模擬保育に参加して いない。
人数(%)	33人(37%)	36人(40%)	20人(22%)	0人	0人

(2) 学生の気づきと保育の実践力について考察

(自己省察レポートから)

ここでは、自己省察レポートから、学生が模擬保育をする中での気づきや学びを明らかにし、実際に造形活動の保育をするときの実践力にどのようなつながっているのかを考察する。もし実践につながるような気づきを体験しているようであるなら、この模擬保育は学生にとって有効であるということになる。自由記述に書かれている文面のうち、材料研究から模擬保育実践まで学生が体験するそれぞれのステージごとに、どのような気づきがあったかをまずは一覧表に整理した。資料2は紙面の都合上、その一部を取り上げ、項目別に数件ずつ記載したものである。以下、それぞれの場面の振り返り・気づきと、保育の実践力の関連について考察していく(①～⑧)。①材料研究の中での気づき、②模擬保育への準備段階での気づき、③環境設定/時間配分についての気づき、④環境設定/材料の種類と分量、配置についての気づき、⑤導入での気づき、⑥活動過程での気づき、⑦活動後の振り返りの気づき、⑧模擬

保育の効果について。

①材料研究の中での気づきからの考察

学生は試作をする中で、子どもの視点から道具や材料を見直す体験をしていた。かく・つくるといった造形的な保育では必ず、道具や材料を扱う場面が出てくるといえるが、学生にとっては当たり前に行なっている「ハサミの扱い」でも、幼児期の子どもによっては「難しい道具」になることもあり、さらにそれが原因で造形表現に消極的になる可能性もある。したがって子どもの視点で道具について考えることは、実践をする上で常に意識をしておくべきことである。

また、学生が参考にした書籍などの資料にはサンプル画像や作り方など書かれたものが多いが、学生は面白そうと思っていざ試作をするのであるが、ほとんどの学生が「思ったより難しい」という感想が書かれていた。試作をする中で、イメージ通り行かず失敗をすることがあるが、それがかえって、「工夫する」ことにつながることに気付いたり、自分ら

しさをどこで発揮できるのかを考えたりすることができた。そして、材料研究は、子どもが安心して自己表現できるように必要であることを感じる学生も多くいた。その他、多くの子どもを対象に材料を準備する際に、身近にある材料（生活廃材）を利用するという発想や、材料費の節約への関心など、現場目線でこの模擬保育を体験できていることが明らかになった。以上、学生は材料研究をすることで、こうした道具や材料に関する保育の実践力を身につける可能性があることが分かった。

②模擬保育への準備段階での気づき

実際に保育をする前には、準備やシミュレーションが必要である。この段階においても、実践力につながる気づきが多く見られた。どのような子どもが参加するのか、その日の子どもの気分はどのようなか（不機嫌、眠いなど）を含めて、導入の内容を考えることを意識したという記述が見受けられた。これは、子どもの状況にあった保育を柔軟に展開するための心構えとして重要である。保育者の一方的な保育ではなく、状況や子どもの様子を見ながら関わっていくことが、表現過程を大切にすることにつながる。そして子どもが個性を出せるように、どのように材料を提供するのか、年齢にあった方法は何なのか、興味、関心に沿った保育の流れを作るにはどのような言葉がけが良いのかなど、活動過程をイメージしながら前もって考えておくことは子どもの活動を充実させる上で重要なことである。

③環境設定／時間配分についての気づき

実際の保育時間は限られている。その時間の中で、指導案に沿った保育内容を展開させていくためには、どこで時間を十分に確保し、ねらいを効率的に達成するためにはどこまで材料を保育者側で整えておくのか、といった、具体的な時間計画と準備が必要である。学生は模擬保育を構想、実践する中で、こうしたことを悩み、結果的にイメージ通りにできたグループもあれば、この難しさを課題として取り上げているグループもあった。また、実際の保育現場でもよく見られるが、作業ペースの違う子どもが混在する場合、どのように対処するのかといった問題にも学生は遭遇している。早く作業が終わった子どもが退屈しないように、またゆっくりペースの子どもの時間を尊重しながら、実際の現場保育者

が抱える課題を学生もこの授業で体験していることがわかった。

④環境設定／材料の種類と分量、配置についての気づき

材料の準備を万全にしたものの、それを置く場所によって、子どもの活動の方向性が変わるということに気づいたという記述が見られた。やる気がある子どもでも道具が手に届かないところに置かれていたグループでは、それを反省し、端に座った子どももすぐに取りれるように再配置したという。物的環境や配置を意識することは、子どもが主体的に活動するための重要な観点である。またコーナー保育の環境設定を行なったグループは、子どもの興味に沿う活動ができたが、保育者側の人数が少ない場合、一人一人に寄り添うことが難しいことが判明したという。コーナー保育の利点や課題について気付くことができたといえる。さらに材料の分量に関して、数人の学生の気づきとして、子どもの目の前にたくさんの材料を置く方が自由に作ることができると思っていたが、かえって作業を戸惑わせることになったことが書かれていた。場合によっては、材料を限定、指定する方が、子どもは表現しやすいこともあるという、実際の保育の中で議論されることも、この模擬保育で体験していることがわかった。

⑤導入についての気づき

導入では趣向を凝らした様々な工夫や実践が見られた。歌や手遊び、絵本を取り入れたり、帽子をかぶったりするなど保育の雰囲気を工夫することで子どもの興味や関心を引き出すことに成功しているところが多かった。また、保育者役は一方的な話題の投げかけではなく、子ども役に質問や対話をしながら楽しい雰囲気を醸し出すことを試みている場面も見られた。かく・つくる活動の保育では子どもの興味・関心に沿って保育が進むように、導入部分をしっかりと考えておくことにより、その後の保育の展開が変わってくるということについて、全グループが実践を通して実感したと思われる。

また、子どもの前に立つ保育実践者として、緊張感や不安を感じたという記述も少なくなかった。保育を任された責任や、保育が計画通り進むかどうかという心配は、実際の保育者も感じることはないだろうか。友達同士で行う模擬保育の中でも、保育

者役と子ども役の立場をわきまえたロールプレイングが効果的に行われていることがわかった。

⑥活動過程の子どもへの配慮や気づき

活動過程では、子どもにわかりやすく伝えるにはどうしたらよいのかを悩みながら保育を行なったという学生が多かった。実際に保育をして初めて、目の前の子どもに伝えるべき内容が伝わらないという事実から、伝え方の工夫が始まる。ある学生は、その対処法として、子どもに寄り添うことの効果について言及していた。ある学生は、見本の示し方の工夫により伝わりやすさが変わること気づいたようである。

また、子どもの表現したい意欲を高めるためにはどうしたら良いのかという、保育現場でも課題となることが記述の中でも多く述べられていた。例えば、活動中の声かけの重要性や、保育者のオーバーアクション、パフォーマンス性の必要性に気付く学生がいた。また声かけのタイミングについて考えたという感想もあった。さらに、子どもが自分で作ったもので遊ぶ時間を確保するなど、活動後の子どもへの関わりも大事にするべきであるという学生もいた。

その他、子どもに直接指導する場面になり予想外のことが起こり、自分の材料研究不足や、グループ担当者間の打ち合わせ不足に気づいたという反省記述も多く見られた。これらのことは正に保育場面で直面する課題と重なるといえる。

⑦活動後の振り返り／保育改善への気づき

画用紙や素材を子どもに渡すとき、特定の色のみを渡すのではなく、色を選んでもらうことによって子どもは楽しめたという感想が多くみられた。保育者役の学生は子どもの個性ができるように素材を選ぶ際に選択肢をつくったが、その選ぶ行為は、子どもの主体的な活動を促すことにもつながっていた。

また保育者側として、子ども側から予想外の発想や展開が見られたことに驚いたという感想も多くあった。保育者は予測される子どもの姿と活動をイメージして保育実践を行うのだが、子ども自身が想定外の行為をしたり、アイデアを広げていくことが、保育の展開そのものを方向付けていくライブ感を感じたのではないだろうか。その場が楽しく、自己表現しやすい環境であったと保育を振り返る記

述もあった。さらに子どもにとって難しい作業もあったが、でき上がったときの笑顔を見たとき、「達成感」の意味がよくわかったという感想もあった。簡単な作業では子どもは楽にできるかもしれないが、取って試行錯誤する機会を活動過程に入れていくことは、子ども自身の気づきや学びを大切にすることにつながり、それが達成感に関わっていくことを学生は体験したと思われる。

保育者グループとして満足のいく保育ができなかったところは、振り返ったときに、子ども自身が主体的になる行程が少なく、子どもの個性が発揮できていないことに気づいた。こうした援助や環境設定に関する気づきは実際に模擬保育を行って初めて体験できるものであると思われる。

⑧模擬保育の効果について

学生は実際に模擬保育を体験して、目の前に様々な状況（性格、スキル、体調、年齢、気分、ペースなど）の子どもがいる現実に気づいた。そこで保育者は保育計画をしてそれを実行していくという単純なものではないことを学んだと思われる。学生自身の記述では、「進め方や伝え方、材料の選び方など参考になり、また課題も見つかった。実習では子どもたちの成長につながるような保育がしたいです」と書かれているとおり、多くの学生にとって、子どもの育ちにつながる視点を持つことができたのではないだろうか。また子どもの造形活動に正解はないことがわかり、「様々な方法を試してみたい」「今回の反省を生かして、ワクワクできる展開を考えたい」という、今後に向けた見通しや意欲も感じられるものもあった。

そして、保育後に、ねらいについて吟味し、子どもの活動や状況にあったねらいを再設定したグループもあった。こうしたことは、PDCAの循環において、さらにより質的に高まる保育を考えていく態度につながるとと思われる。

5. まとめ

本稿では、学生が保育実践に対応できる力を身につけるための授業のあり方を検討する中で、造形活動の模擬保育実践を通しての学生の意欲と気づきに注目した。意欲については、ルーブリックによる意識調査によると、材料研究、グループワーク、模擬保育において、多くの学生が意欲的に取り組んだこ

とがわかった。保育計画については、保育実践を重視する本授業の中では詳細な指導案の指導時間を取ることができないので、学生にとっても難しく感じたところがあると思われる。他授業との連携の必要性があることが明らかになった。

次に模擬保育を通しての学生の気づきからは、保育の実践力につながる多面的な体験ができていたことが明らかになった。体験を通して学生は、思い通り行かないという、当たり前の事実に向き合い、戸惑い、子どもの様子や全体の状況に臨機応変に対応せざるを得ない姿が多く見られた。保育の導入では一方通行の指導ではなく、子どもとの対話の重要性を知り、活動過程では意識的に子どもに寄り添うことの必要性に気付く学生もいた。そして子ども自身が活動を広げ進めていくというライブ感を体験することにより、子どもの表現過程を大切にしたい造形の保育について認識する機会を得たのではないと思われる。実践力とは、すぐに何か答えを出すことではなく、常に状況を察知しながら、その都度、目の前の問題に対処していくという構え、姿勢であるとするならば、今回授業に取り入れた模擬保育では、学生にとって保育の実践に向けた多くの力につながる体験ができたと思われる。

総じて、模擬保育を授業に取り入れることにより、実践力につながる学び、本論では特に活動過程を大切にしたい造形保育の学びを学生が体験できていることが明らかになったといえる。

2017年に策定された教職課程コアカリキュラム(文部科学省)⁴⁾では、保育内容の指導法に関する科目の全体目標に「幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身につける」ことが明記されている。そして、到達目標の一つとして、「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身につけている」ことが書かれている。今回、学生の自己省察レポート内容からの考察では、上記の目標についてはおおよそ達成されたと思われる。ただし、限られた時間で全員が十分な活動ができたかどうかは不確かである。今回は学生の学びの内容が明らかになったので、今後はそれがどのくらいの割合で達成されているのかを分析し、学生一人ひとりの自己省察を通じた成長を援助できる授業形態を目指したいと考える。

資料1 自己評価ルーブリック

評価 素点→	5	4	3	2	1
A. 材料研究 (個人研究)	〈右〉にプラスして、時間をかけて試行錯誤する過程を十分に楽しんで取り組むことができているとともに、自らのオリジナル性を見いだすことができる。	時間をかけて様々な情報を探索し、試行錯誤することができる。失敗を恐れず、新しい技術や手法を獲得することができる。	情報収集はするが、具体的に素材に関わることが少ない。これまでの自分にとどまっている。	情報収集をすることに消極的である。また素材に関わることには消極的で、これまでの自分にとどまっている。	取り組んでいない、発表していない。
B. 材料研究 (グループ研究)	〈右〉にプラスして、仲間の表現に対して受容・共感・賞賛の姿勢を持つことができる。	仲間と十分協働して取り組んでいる。	仲間の表現に対して十分聞いていない。あるいは、仲間と十分に協働して取り組めていない。	仲間と協働ができていない。	取り組んでいない、発表していない。
C. 研究発表 (模擬保育実践)	〈右〉にプラスして、模擬保育に参加する学生(子役)との対話の中で、興味・関心を大事にしながら、柔軟に内容を創造的に展開できている。	グループで設定した模擬保育の「目的」に沿った実践ができている。また子どもの興味・関心を大事にしている。	グループで設定した「目的」と模擬保育の内容がかけ離れている。	研究発表に参加したが、積極的に取り組めていない。	取り組んでいない、発表していない。
D. 保育内容計画 (レシピシート)	〈右〉にプラスして、レシピシートの内容が楽しく有意義で、十分に活用できるレベルである。	材料研究で学んだことを踏まえ、チームで協働しながら、レシピシートが作成できている。	チームで協働しているものの、材料研究で学んだことが十分に踏まえていないレシピシートになっている。	チームでの協働が不十分であり、完成度が低い。	未提出。
E. 子どもの視点 ／ 子ども役になって	〈右〉にプラスして、援助・指導の課題が指摘できるとともに、改善策を提案できる。	模擬保育に積極的に参加し、子どもの視点から、援助・指導の課題が指摘できる。	子ども役として模擬保育に参加し、保育者の援助・指導のもとで活動ができる。	模擬保育に参加はするが、何のために行っているのか目的を見失い、受身的である。	模擬保育に参加していない。

資料2 学生の気づき（自己省察レポートからの抜粋）

①教材研究についての気づき

- ・接着剤は何かいいのかが、ハサミをどのように子どもが使う場面があるのかなど考えた上で材料をどこまで整えておかなければならないのか、考えた。
- ・教材研究をする中で、失敗して色々試し、工夫することが大切であることがわかった。
- ・子どもの主体性や個性を失わないよう、どこまで準備をするべきかを考えるのが難しかった。
- ・教材「リュック」を作るというテーマは決まったが、それを十分に楽しむために何か工夫があるのでないかと考え、「動物になりきって表現してみる」という狙いを立てることになった。実際に体験者の感想では、「動物の帽子をかぶると表現に対する気持ちが高まった」の意見があり、やはり導入の工夫が必要と感じた。
- ・どのような保育をすれば子どもたちがワクワクして楽しむことができるのかを考える機会となった。
- ・試行錯誤しているうちに、私は保育者としてではなくまず子どもたちの気持ちに立って保育を考えるということができるようになった。
- ・お弁当がテーマであったが、このテーマを通して子どもたちがお弁当に興味を持ち家庭でも食べ物に対して関心を持つきっかけになってくれたらいいという願いがあった。
- ・教材を試作したが、実際に作ってみると書物資料だけではわからない難しさや大変さがわかった。子どもに保育をする前は必ず自分で作ってみるこの大切さを理解した。
- ・基本的に廃材や身近にあるもの簡単な手に入るもので準備できることが大切であると思う。
- ・身近なありふれた紙が、こんな風に活かせる！と感じる新鮮な気持ちで、様々な素材を見ることが大切。
- ・子どもが安心して自己表現できる活動ができるよう保育者の事前準備が大変重要だということ学んだ。

②保育への準備段階で考えたこと

- ・発達状況や子どもの性格なども配慮した上で準備方法を工夫する必要がある。
- ・子どもの中には不機嫌であったり眠かったり様々な状況の子どもがいることも想定して準備をする必要がある。
- ・年齢や発達を把握し、子どもにとって難しすぎず簡単すぎない「ちょうど良い」活動を取り入れていくことで自己表現や集中力を養うことができると考えた。
- ・自分が作るだけでなく、子どもがここでは何を表現したいだろうか、そう思うような環境設定や準備はどんなものが必要なのかを深く感じるきっかけになりました。
- ・たまごの殻を使った造形を考えたが、アレルギーに関してはしっかりと下調べをする必要があった。また消毒をして子どもに危険がないようにしたい。
- ・準備段階で子どもたちが製作する姿をイメージし、必要な道具を準備したり、難しそうなところはどのようにしたらわかりやすくなるか工夫することができた。
- ・グループで行っている中で準備をする上で役割分担をしやり取りがスムーズになることが大切。

③環境設定/時間の配分

- ・組み立てから飾りつけまで作るのは難しい上に時間に追われて急かすかのような状況になってしまったため好ましくなかった。
- ・保育時間の配分をしっかりとって、導入・制作・片付け・遊びに広げるといった一連の流れが配分よく行えることが大切であると思う。
- ・子どもによって作る速さが違うので、急がしたりしないように、また作り終えた子どもが時間を待たずに退屈しないように制作の後の環境設定が必要になってくると思う。

④環境設定/材料の種類と分量、配置

- ・画用紙を様々な種類を準備していたが多くて嬉しいと感じる子どももいれば、自由すぎるが故の不自由を感じている子どももいたことがわかった。その集団にどのような子供がいるかによって、分量を調整することを学んだ。
- ・道具や素材の配置が子どもにとって使いにくいものであった。やる気がある子どもでも道具が届かないとやる気が失せる場合もかんがえられる。
- ・机が広い中、真ん中にトンと材料が置いてあり、取りにくい子どももいた。端に座った子どももすぐに取りやすいように道具や材料の配置を考える必要があると思った。
- ・参加した子どもも役から、ボンドの数が足りなかったという意見が出された。自分は活動過程で気づくことができなかったので、もっと、冷静に子どもが製作する様子を見ていれば、足りない材料について途中で気づいて足すことができていたと思う。適切な援助を予測していなかったことも反省点。
- ・コーナーごとに分かれて活動できるように設定したので、子どもの興味をくわき、伝わりやすかったと思われる。しかし人数が多かった場合は説明が伝わりにくくなってしまったと感じた。
- ・限られた時間で、子どものオリジナリティを出すことを考えた時、どこまで保育者が準備すべきか悩んだ。

⑤導入についての気づき

- ・導入で歌を取り入れたことにより、参加者は興味関心が湧いたと思われる。
- ・帽子をかぶることでイメージを膨らませることができた。
- ・導入で絵本を読んだり歌を歌ったり、子どもに質問を投げかけたりするなどで今から行う活動のイメージを子どもの中にしっかりと膨らませてから行うことで、子どもはたくさん想像力を働かせたと思われる。
- ・見本は動物以外にも作っておけば、もっと展開できたかもしれない。(見本は様々な種類を用意することも検討する)
- ・「リュックにお絵かきしよう」というのは子どもの興味関心を引き出しやすかったと思う。実際に子どもが相手にするときには、歌いや目線、説明の仕方をもっと細かく研究して、さらにわかりやすく入り込みやすい工夫をする必要があると思った。
- ・導入で歌を歌った方がいいのか、ない方がいいのか、直前まで迷いドキドキしていた。

⑥活動過程の子どもへの配慮や気づき

- ・どうしたら年齢の低い子どもに伝えられるかということ考えた。私の場合は一緒に横に寄り添って作ってあげるということを意識した。そうすると子ども役の子も模倣して同じように作ることができた。
- ・子どもの作業スピードが違うのでどのようにしたら良いのか悩んだ。どの子どもに合わせた方がいいのか調節がしにくかった。
- ・みんなの表情を見て、楽しんでくれているか、その後の活動につながっているか、不安を感じていた。
- ・始まると終わりに声掛けや支援の仕方はある程度できたと感じるが、活動中の声掛けをもっとできたら、子どもは表現したい意欲を高めることに繋げられたのではないかと感じた。
- ・時間がなくそれぞれの子ども作品をじっくり見ることはできなかった。もう少し時間があればじっくり見て感想を言い合うこともできたと思う。
- ・保育の中では少しオーバーなくらいのリアクションを意識して行った。
- ・子どもの目の前で作る過程を見せたり、わかりやすい見本を用意することが大切だと思う。
- ・子どもが持つべきポイントや保育者の声掛けの必要なタイミングなどを改めて考えることができた。
- ・やりたくない子どもにも無理やりさせるのではなく、違うことを提示したりして子どもが興味を持って活動を行える環境、言葉かけを考えることの大切さを学んだ。
- ・保育者も子どもと一緒に楽しむことで、子ども達と感情を共有しより良い製作ができると思った。しかし、保育者がやりすぎてしまうと、子どもは十分な達成感を得られないようだ。保育担当が数人いて、バラバラであったので、もっと分担して子どもに寄り添うことが必要であると感じた。

⑦活動後の振り返り

- ・子どもは動物になりきり、リュックの中身を自由に考えることができたので自己表現の機会があったと思う。またリボンやシールなどの装飾物もたくさん用意していたのでより楽しく、自分の作りだしたものを作れたと思う。しかし意見でもありましたが、リュックの形はあらかじめこちらが決めて作っていたので、リュックの形や干物素材にもっとこだわりを出せるようにすれば良かったと思った。
- ・色々なものをカバンに描いているのでそれぞれの子ども個性が出たものになった。
- ・子どもはお弁当箱にのりように詰めることができるが試行錯誤することができた。まるで自己表現ができる機会があることに気づいた。予想以上の作品を参加者が作ってくれた。
- ・メインの制作物だけでなく、完成後の帰って帰る際の種類の種類や色など、様々なところで自己表現ができる機会があることに気づいた。予想以上の作品を参加者が作ってくれた。
- ・卵の殻でデザインした絵を作る教材であるが、子ども役から、前にぶら下げたいという要望が出た。想定外の意見であったが、子供から、自分の作ったことを発展させたいという意見が出されたことは良いことと思う。
- ・こちらの想定よりも多くの動物などを作ってくれ、自己表現はしやすかったのではないかと感じる。
- ・保育する側が思っている以上に、子ども達は想像力が豊かで、どんなアイデアが広がっていくと感じた。
- ・自分が考えつかなかった表現（染めた和紙で髪の毛をつける、襟をつけるなど）をしている人も、保育は子どもたちが展開させてくれることもあるのだと感じたし、子ども役の人がこの活動を楽しんでくれているというのが伝わった。
- ・予想外のことが多く起こることを感じた。スライムの教材をしたが、液体であるため、子供はこぼしてしまう可能性がある。したがって、新聞紙を用意しておく、お手ふきタオルを置いておく、そして、水道へ行きやすいよう導線を確保しておくということが必要であることがわかった。今回の実践であらゆる方向から考えて環境設定しなければならないということに気づいた。
- ・少し難しい工程があったが、出来上がった時の達成感の笑顔が得られたと思う。集中することにより夢中になり、チャレンジ精神も生まれると思う。

⑧模擬保育の効果について/保育改善への気づき

- ・気分が沈んでいる子ども、造形が好きな子、嫌いな子どもなどさまざまな子どもがいるので、そのままの気持ちをしっかりと掘んで、一人一人対応していくことが大切であると感じた。
- ・このようなシミュレーションは実習でも役立ち感じた。進め方や伝え方、材料の選び方など参考になった。また課題も見つかりました。実習では子どもたちの成長につながるような保育がしたいです。
- ・造形に正解がないとわかり、もっと色々な方法で同じことをやってみてもいいと思った。
- ・ハサミで切る作業が多かったので、対象年齢を考えた時、準備物の検討が必要となる。
- ・子どもたちが自身が形を考えて作るという工程が少なく、子供達一人一人の個性を發揮しにくいという意見が挙げられた。子ども一人一人が楽しいと感じながら自由に自己表現できるような工夫を考えたい。
- ・コメントシートの中に「いつもお弁当を作ってくれている保護者の人に感謝する」という狙いを立ててはどうかという提案があり参考になった。お弁当作りを通して食育にもつながると思った。
- ・お弁当を作った後に、ごっこ遊びなどに広げることができるよう、保育を展開した。
- ・子どもが何に時間をかけたのか(今回の場合人形の顔を描くこと)を把握して時間設定をするべきであった。今回時間が足りなかった理由に、私たちの時間設定と子どもがしたいこととにかけると考えた時間設定とにズレがあったからではないかと考えた。
- ・狙いは「身近な材料を使って色や手の感触を楽しむ」というものにしたが、実際保育後に考えられたことは「友達と一緒に材料を使ったり相談して作る」である。活動過程を見てこのように子ども達の学習効果があったと思われる。
- ・今回は卵の殻を砕いて模倣を作ったが、季節に合わせて落ち葉を使ったり折り紙を使うなど考えられる。8バリエーションの発展
- ・今回の実践形式のワークショップを体験して、やってみないと気づかない、子どもの動きや意図が少し見えた気がしてやりがいがあった。楽しみながらできました
- ・活動時間は短くても、準備する、研究する時間は相当なものであり、保育者の大変さを感じた。けれどもそれ以上に子どもたちの心の中で新たな気づきや学びがあればとても良い。
- ・今回の模擬保育では子どもたちの目線に立って、どのように環境構成されていると楽しめるか、道具や素材の配置や楽しめるような言葉かけの工夫を考えることができた。
- ・今回のワークショップは一人でできないことで、友達と協力しあったからこそ楽しかった。
- ・一つの保育を実践するまでに、何をくくか決めるだけではない、何を準備するか、どのように指導するか、かなり行程があることを実感した。常に狙いからずれていないかを、頭に置きながら考えて、工程を踏んでいくことができた。
- ・保育者役と子ども役になることで、自分では気づけなかったことがあった。

註・参考文献

- 1) 松山由美子「保育者養成における『保育実践力』育成のための学びの場—模擬保育と学外実習に関する質問紙調査の結果からの考察—」『四天王寺大学紀要』第49号, 2010, pp.197-212. この論文の中で松山は「保育実践力」について「保育について学んだ知識や考え方をもとに、自分がどのようなスタンスで保育者として子どもに向かうのかを意識したうえで、自らの保育技術をもって子どもの遊びを援助することができる力」であるとしている。
- 2) 近年、模擬保育を通して保育の実践力について調査した研究は多く存在する。例えば下記のものがある。
 - ・杉村智子・安東綾子「保育内容の指導法における模擬保育実践—能動的な共同による学びの視点から—」『帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要』第3号, 2018, pp.77-87
 - ・坂本真由美「模擬保育を通じた自己省察の試み」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要』第47号, 2015, pp.111-116
 - ・櫻木真智子「保育専門科目に実践を取り入れることによる学びに関する報告—『保育内容・健康』に模擬保育形式の運動遊びを導入することの効果为例として—」『聖徳大学研究紀要』第27号, 2016, pp.127-136
 - ・高原和子・瀧信子・矢野咲子「保育内容（表現）身体表現指導における模擬保育後のふりかえりに関する—考察—」『福岡女学院大学紀要』第17号, 2016, pp.23-28
 - ・坂本真由美, 田中るみこ「自己省察が学生の保育実践の意識向上に与える影響に関する—考察—模擬保育における他者評価と映像の自己省察から—」『中村学園大学発達支援センター研究紀要』第7号, 2016-03, pp.19-24
 - ・河北邦子「保育者養成における音楽表現指導実践力についての研究Ⅰ—模擬保育の自己・他者評価調査を通して—」『山口学芸研究』第3号, 山口学芸大学教育学部, 2012, pp.55-73
- 3) これまで関西学院大学教育学部の保育内容「表現Ⅱ」授業の中で、中川香子（聖和短期大学教授, 2019年現在）・青木宏子（大阪教育大学特任准教授, 2019年現在）は、学生による模擬保育形式のアクティブ・ラーニングを取り入れ、保育実践力に即応した学びを学生に提供してきた。2017年度より筆者も同じ授業（2クラス）を担当することになり本研究に至った。
- 4) 文部科学省：教職課程コアカリキュラム, 教職課程コアカリキュラムのあり方に関する検討会, 2017年11月17日, p.8